

学童を子どもたちの 第三の場所に

代表 篠田 花子さん

近年「学童保育」ということばを耳にする機会が多くなりました。これは両親が動機に出ている子どもなどを、放課後、保護者に代わって保育することで、放課後児童クラブ・児童クラブなどともいいます。
岐阜市美島町3。「美島公園」内の自治公民館「美島会館」に、民間の学童保育「ヒトノネ」があります。公園内にあることもあり、子どもたちは地域の方々の日常の見守りにも恵まれながら、安全に楽しく、体験的な学びを重ね、充実した放課後を過ごしています。

運営するのは代表の篠田花子さん。2018年に創業。きっかけは、放課後の預け先が見つからず保護者が離職を余儀なくされる「小1の壁」を目の当たりにしたことでした。

「岐阜市は共働きが急増し、公共の学童保育は満杯になりつつある状態です。子どもによっては公立学童保育になじまなかったり、また地域によって学童保育の運営内容も違います。学童保育に子どもを預けることができなくて仕事を辞めざるを得ない女性がいることは大変残念なことです」

篠田さん自身も母親として同じ立場にいました。

「もともと当事者だったこともあり、このままだと私も働けなくなっちゃう

と困る。そう思った時に、だったら私が学童保育を作ってしまおう、と決意しました」

開業資金にはクラウドファンディングや、商工会議所の創業塾、若手起業家を応援する制度(nobunaga21)にもチャレンジしました。篠田さんの思いや努力に賛同した多くの仲間からの応援、また良い場所にも恵まれたこともあり、ヒトノネは創業へと進んでいきました。

「ヒトノネ」の場をつくる

2018年1月。同じ志をもつ仲間とともにスタート。「ヒトノネ」という名前には、人の根っこを信じ、育てる。人の音色が響きあい、共鳴すると



セリの体験をする子供たち

子どもの立場からすると、学童保育は学校でもない、家庭でもない遊びと生活の場。昔のように近所に子どもの遊び場が自由にあり、どこでも楽しく過ごせる時代ではなくなったからこそ、今「学童保育」の必要性が増しています。

「放課後や長期休暇に、自分の好きなこと、知らないことに触れるきっかけをつくり、経験のストックを増やすそれを仲間と味わえるのが学童保育の良さだと思います」

篠田さんはヒトノネが、そんな子どもたちのサードプレイス(心地よい第三の場所)となればと強く感じています。

多様性と共存の場をつくる

そのなかで、篠田さんが今取り組んでいることはインクルーシブ(人間の多様性を尊重し、孤立や排除されたりしないよう支え合う)な場を作ることです。

「学童保育を始めて分かったことですが、色々な学びがある中で、さまざまな個性を持った子どもや発達凸凹の違い、異年齢の子どもたちが一緒に過ごすことはお互いに良い効果があると感じました。学校だけでなく、放課後にも多様性が共存する場が必要です」
そこで、新たに障害児の通所サービ

ス「放課後等デイサービス事業」の展開を、今年の初夏開始を目途に進めています。

「専門的なビジョントレーニングと個別の学習指導、さらにヒトノネで培ってきた体験的な学びができる環境を作りたいと思っています。民間学童も併設し、ご兄弟の預かりニーズや健常児との交流なども積極的にこなしていく予定です」

社会課題と向き合う場をつくる

篠田さんは近々、持続可能性のある社会をつくるために自分たちはなにができるんだろう、ということを考える探究型学習「サス学」を導入する予定です。これは、SDGsをテーマにして学びを深掘りし、大人になっても通用する「思考力・発想力・表現力」を育む学習です。

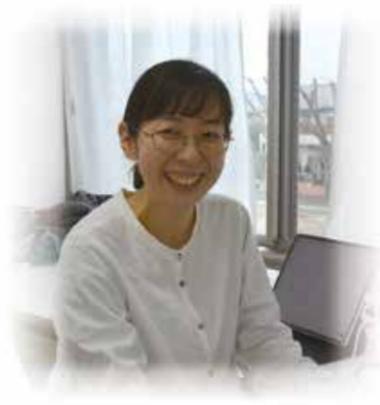
「社会で必要とされる力の変化に従い、今後入試も変わりますし、学びの方法も変わります。正解のない課題に向かい、自分で問いを立て、考えをアウトプットする力が求められています。そうした力を養う探究的な学びにSDGsはとても相性がいいんです」

昨年の夏休みには環境活動家と話をしたり、養蜂家と繰り返し使える「蜜

蠟ラップ」を作り、このラップの何が良いのかを議論しました。今後も「子どもたちが自分たちで答えを出しているような学習や活動を積極的に取り入れていきたい」と語ります。

「働きたい」「学びたい」のサポートの場

「岐阜のジェンダーギャップはまだ大きく、岐阜で働く女性たちが働き辛いという環境を少しでもなくしたいという気持ちがとても強いです。まずは、就業継続し女性の管理職比率を高め、女性活躍社会のロールモデルを増やすことが必要ではないでしょうか。今、目の前にいる子どもたちが社会に出る頃には、女性が働くことを諦めないでよい岐阜にしたいです。働こうと思ったときに、子どもの預け先の選択肢がないと、結局は子どもにしか寄せがいてしまいます。子どもが寂しい思いをするくらいなら仕事を辞めようではなく、子どもが毎日ワクワク楽しんでるから、私も仕事を頑張ろう」と思ってもらいたい。働いている間に子どもには充実した時間を過ごしてほしいという願いは、多くの親の共通の想いです。子どもたちが安心して豊かに育つ場の選択肢を広げることが、



という意味が込められました。

篠田さんは、子どもたちに「学ぶ楽しさ」を伝えていきたいという思いから、「自分だったらこんな学びがあったらいいな」と思うことをカリキュラムにどんどん取り入れていきました。プログラミングや食育、魚屋、建築士など地元で活躍する「その道のプロ」を招聘。子どもたちに社会とのつながりを伝えていきます。

「魚屋さんには『セリ』を体験させてもらったり、オンラインで社会見学をさせてもらうなど、本物体験を大事にしています」

そんな篠田さんの思いが伝わる探究型学童は、働くお母さんたちから多くの支持を集めるようになりました。

働きやすさの一助になると思っています」

そんな働く父母の思いに、これからもひとつひとつ応えていきたい。放課後だからこそできる時間の過ごし方や学び方を、地域と学校教育と家庭との共創で作っていきたい。篠田さんの強い志を持った瞳は優しくまっすぐに輝きます。